域学連携プロジェクト

慶應義塾大学総合政策学部教授
飯盛　義徳

地域を元気にするために地域の持つ潜在的な資源を活用するにあたり、教育機関に寄せる期待が高まっている。慶應義塾大学飯盛義徳研究室では、現在、自治体、NPO、企業などとの協働により地域を元気にする「域学連携プロジェクト」を多数実施している。本稿では、域学連携を効果的に進める手法、プロジェクトに関わった学生の成長や変化等について紹介する。

1　域学連携

「域学連携」とは、総務省の定義によると、大学（学生や教員）が地域の人々と一緒に地域の問題解決につながる実践活動を行うものである。域学連携には、分野、主体、内容などによりさまざまな形態があり、例えば遠隔地の大学か地元の大学かでも関わり方は異なる。遠隔地の大学が関わる場合には、主体は地域の人々であるという色彩がより強くなる。

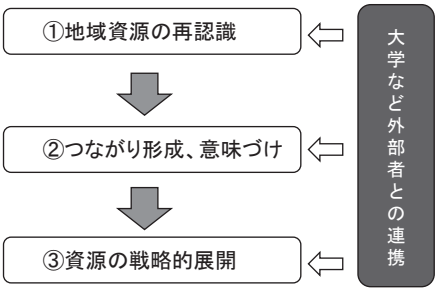
大学としては、地域の課題解決につながるような活動を地域の人々と一緒になって行うが、最終的には大学の関与がなくなっても地域で自律的に活動が続くような仕組みづくりを目指している。

そうした仕組みづくりにあたって一番留意すべきことは、コミュニケーションを緊密にし、本音で意見を交わせるような場づくり、すなわち「地域における効果的なプラットフォームづくり」をいかに行うかである。これまで地域の人々が協働して取り組むことがなかったようなところに、我々が入ることで触媒のような役割を果たし、一緒に何かやり出して、新しいことや価値を生み出していく。つまり今まで関係のなかった人たちが集まりイノベーションを起こす、その場づくりこそが重要である。

2　資源化プロセス

大学が域学連携に取り組むことにより、地域にはどのようなメリットが生まれるのだろうか。ここでは、地域資源展開を中心に検討してみたい。

地域には、自然、歴史、文化、人、食など多くの資源があり、これらをうまく活かすことで地域の活性化や地域の人材育成の道は開ける。資源があるかないかに拘泥するのではなく、「資源にしていく」という姿勢が大切であり、これを私は「資源化プロセス」と呼んでいる。資源化プロセスは、下図のように①地域資源の再認識、②人や組織同士のつながりの形成、意味づけ、③資源の戦略的展開、というフェーズに構成される。



資源化プロセスと大学との連携

まず、①のフェーズでは、普段の生活においてつい見落としがちな魅力的な資源を、学生たちが見出して光を当てている。②のフェーズでは、学生たちの訪問がきっかけで地域のさまざまな人や組織がつながり、「新たな結合」がもたらされることがよくある。③のフェーズではSNSや口コミなどを駆使した、学生の情報発信力、センスが活かせる。このように、資源化プロセスを確立する上で、大学、特に学生の果たす役割は大きい。

八女市元気プロジェクトでのフィールドワーク

3　プロジェクトを通じた学生の成長

私は「地域そのものがキャンパス」と表現しているが、地域には大学教員など足許にも及ばない豊富な知識を持つ人がいる。学生たちは、地域に入り世代やバックグラウンドが異なる人々と接することで多角的な視点やコミュニケーション力を身につけることができる。プロジェクトへの関わりが深いほど学生の成長度合も高くなるようである。

また私は、「知識を抽象概念だけに留まらせるな」と学生たちに常々言っている。大学の講義やゼミで勉強した理論やモデルなどの抽象概念を、実践を通じて自分のものとして理解する。このプロジェクトはそうした学生の気付きと成長の場になっている。

4　地域プラットフォームの設計

域学連携において多用な主体が集まり議論できるプラットフォームの設計のポイントは、①強い関係性と弱い関係性の融合、②内と外をつなぐ効果的境界設計、③主体性を育む資源持ち寄り、の３つである。

各々の関係性をうまく融合し、強すぎもせず弱すぎもしない、可視性が高く出入りが自由な状態、つまり内でもあり（なく）、外でもある（ない）、自由な思考、実践が可能な状態が、地域における組織間の効果的な境界の特性と言える。

また、世代や地域が異なるさまざまな主体が資源を持ち寄ることは、①利用可能資源の拡充、②多様な資源の新たな結合による社会的創発、③主体性の萌芽という点においてプラットフォームづくりに有効である。

5　今後の発展に向けて

大学は教育研究、地域は活性化が前提としてあるが、互いにWIN-WINの関係になるようにバランスをしっかり取る必要がある。まずスタートとして、大学・地域に拘らず、コミュニケーションを積極的に取ること、一歩踏み出すことが重要だと考える。まだ試行錯誤は続くが、皆さまのご理解をいただきたい。